

宮地裕基金による人材育成研修講座の取組みに寄せて

宮地裕（みやじ ゆたか）氏（1924年1月～2021年2月）は、京都大学大学院を修了後、京都府立西京大学（現：京都府立大学）、国立国語研究所、大阪大学等で長年にわたって研究・教育に携わってこられました。宮地氏は、博士学位論文の「現代日本語形態論」をはじめとして、現代日本語学の領域において数多くの業績を残されていますが、ここでは宮地氏と日本語教育・日本語教育学会との関わり的一端をご紹介します。

宮地氏は、1950年代から日本語教育との関わりをもたれ、1983年6月から1995年5月まで12年にわたって本学会の副会長を務めてくださいました。学会誌『日本語教育』には下記の6編の論考が掲載されています。

- 1号（1962.12） 「話しことばの文型」
- 25号（1974.12） 〔特集〕「一二の基本問題について－日本語教師論に寄せて－」
- 33号（1977.7） 〔特集〕「慣用句と連語成句」
- 37号（1979.3） 〔特集〕「中級日本語教育の問題点」
- 47号（1982.6） 〔特集〕「動詞慣用句」
- 50号（1983.6） 〔特集〕「日本語教師の資格認定について」
- 63号（1987.10） 〔特集〕「日本語教育能力検定試験について」
- 109号（2001.4） 寄稿「経験から思うこと」

ご専門の領域だけでなく、日本語教師や日本語教育の環境整備にも早くから関心を寄せて発信して下さっていたことがうかがえます。最後の寄稿となった「経験から思うこと」では、ご自身の日本語教育経験のいくつかを振り返りながら、まとめの3点の一つとしてこう語っておられます。

“教育の研究”を含めて研究なしに教育のレベルはあがらないと思う。同時に、研究者の育成にはその教育が欠かせないことも明らかである。研究と教育とはそれぞれ独自であって相互に深く相関する。両者をよく機能させるには、その運営の力を軽視することができない。（中略）教育と研究とが、それぞれの独自性のもとに相関し、その運営とともに発展しうるような、そんな叡智を希求せずにはいられない。

宮地裕基金人材育成研修講座が、教育・研究・運営の三位一体の発展を願っておられた宮地氏のご遺志に叶い、少しでも受け継ぐものとなれば幸いです。

宮地氏の業績やお人柄については、『日本語学』（明治書院）の2022年夏号（vol.41-2）で「宮地裕先生追悼特集」が生まれ、関係諸氏が語られています。上記の『日本語教育』掲載論考とともにぜひご一読ください。

（公益社団法人日本語教育学会）